第三百二十七話　もどかしき中国との戦い！

大東亜戦争を顧みて、日本が米国の圧倒的な軍事力・経済力・科学技術力に敗けたことはある程度納得できるが、英や蘭に敗けたという意識は全くないし、ましてや中国（国民政府）に敗けたとも思わない。そういう意味でも、支那大陸における日中の抗争にはどうも消化不良感が漂う。この違和感はどこから来るのだろうか？敗ける筈のない中華民国や国民党軍等に何故梃子摺り泥沼に陥ったのかが解明されない限り、消化不良感は解消されない。

国民政府は、その軍隊も経済力も政治体制も極めてお粗末であり、当初、日本は、精鋭日本軍の政経軍の中枢への一撃により、容易に屈服する筈と信じて疑わなかったが、日本の朝野にとって、蒋介石の強かさは想定外だった。何故、そうなってしまったのか？

１　会戦を求める日本軍と決戦を回避・逃げ回る軍隊

国民政府軍の弱さを承知している蒋介石軍は、決戦を回避し、広大な大陸内に後退・逃げ惑った。蒋介石は、日本軍の戦線が伸び切り・広がり過ぎた戦線を狙って短切に痛撃を加えることを基本戦略として指導したと考えられる。弱い軍隊、敗ける筈のない軍隊に翻弄されていると言っても過言ではない。

２　経済体制・中枢を撃破し得ないもどかしさ

近代的な産業立国ではないので、国家経済の中枢たる地域や産業がなく、日本としては何処を攻撃・破壊・占領しても、中国経済を破壊することは出来なかった。前近代的な経済が逆に強みになったのだろう。

３　交戦相手は中華民国一国のみと判断する日本と国際連盟・諸外国を巻き込む中華民国

中国一国のみでは、日本に抗し得ないと判断した蒋介石は、第二次上海事変以後中ソ不可侵条約を締結（1937/8/21）し、援助を受け始めた。また、ドイツの軍事援助をはじめ欧米諸国の援助をも受け始めた。列国は、物心両面の援助を中国に与えた。

こうなると対中和平を模索するにしても、その実現は極めて不透明とならざるを得ない。戦争相手の限定に失敗、連合の阻止に失敗した日本はもどかしかったろう。

４　中華民国民のナショナリズム・戦意見誤り

日本は中国の民度を見縊っていたのだろうか？蒋介石の対日交戦意思は弱いと感じていたのか？日本軍が一撃を加えれば、容易に屈服すると考えていたのか？第二次上海事変後の軍事作戦は、南京攻略戦～徐州作戦～武漢作戦～広東作戦へと続くが何れも戦争目的達成に寄与しなかった。

日本は蒋介石はじめ中国人の戦意・ナショナリズムを見誤っていたとしか思えない。如何な攻撃を受けても挫けることのない反日・抗日意識を理解できなかった。

５　抑々日本の戦争目的は何だったのか？

日本は繰り返し、「中国国民を敵視しないし、領土的野心もない。」と明言していた。盧溝橋事件以来、日本は、現地解決・不拡大が基本方針だったし、日本軍の作戦目的も当初は、悔日・抗日に対する「暴支膺懲」であった筈だ。が、中国が中ソ不可侵条約を締結し、ソ連の脅威がより高まってきたと感じた日本では、防共をも目的化し、或いは事変が長期化するにつれ蒋介石政権の排除が目的化になったやに思われる面もある。大東亜共栄圏に反対する政権の排除が目的ともなった？何れにしろ、支那問題の早期解決を願いつつも、対中国戦の戦争目的を確立することなく、不明確なままであった。それは日米戦が始まっても引き摺り、結局為す術なく、可笑しい可笑しいと感じつつも戦いを継続しなければならなかったということではなかろうか？

＊　明確な目的を欠き、次元の異なる考えをする相手との戦いは、収拾がつかなくなる。

＊　力と力の戦いであった日米戦と日中戦は明らかに次元が違う。そこに戸惑いがある。

（了）